Nouveau Livre

新しい本

目次

はじめに 2

夢の本、本の夢／樋口恭介 3

ウォルポニストの彼女／中村健太郎 7

あなたにおすすめの本は／冨倉由樹央 10

町にひらかれる立ち読み本／中橋侑里 14

殖える本／菊池洋子 18

墓前本／原田真喜子 20

実験教育都市・図書街におけるキュレーション学習：探究学習における「問い」と「街/本」の接続／大井 将生 et al. 29

奥付 43

はじめに

新しい本について考えていたら、新しい本について考えている軌跡自体を本にしたい、ということになったのですが、本というものの持つ機能について思いをめぐらせてみると、そもそも現実で起きつつあるできごとや体験について、自分以外の誰かに届けるためにその形式をとっているものを指すのだなと気づかされ、何ヶ月か（もう忘れた）にわたって、誰しもに公開されたウェブサイトと誰しもを招待可能なDiscordというテキストコミュニケーションを前提とするツールを用いて、ときにリアルタイムに、ときに過去ログを参照しながら進められてきた、このワークショップ自体がもしかしたら一つの「新しい本」の読書体験だったのかもしれないな、となんとなく座りのよろしいまとめのようにまとめることもできうるような気がいたしました。

つまり、古いものであれ新しいものであれ、本とは一つの場なのであると、これを書きながら知ったのです。この「古い本」を始まりの場として、新たな「新しい本」という場が生まれていくことを、心より願っております。

樋口恭介

夢の本、本の夢／樋口恭介

本の夢を見た。あるいはそれは、本が見続けている私についての夢とも言えた。

生家には本が一冊だけあった。タイトルもなければ著者名もない、挿画もない、厚紙でできた白い表紙が百ページほどの紙の束を包んだだけの、無味乾燥な本だった。特に置き場が決まっているわけでもなく、テーブルの上や床の上、廊下や階段や枕元など、家の中のどこにでも、気づけばそれは視界にあった。いったい中には何が書かれてあるのか。私が気になりページをめくると、どこからともなく無数の細かな黒い点が現れ蠢き、蟻が行列を成すように、白いページに一瞬にして文字列が並んだ。記憶が正しければそれは三歳の頃だったと思う。私は驚きそれから怖くなり、あっと小さな叫び声を上げて本を閉じた。

小学校に上がった頃だったろうか。あるとき父が本を読んでいた。見た目は変わらず、やはりタイトルもなければ著者名もない、挿画もない。何を読んでいるのかと訊ねると、父は単に本だと言った。それ以上は何も言わなかった。本とは単に本である。だから私の家ではみな、すべての本を単に本と呼ぶ。私たちはそう納得して、それ以上は誰も何も言わなかった。

高校を卒業し、進学のために家を離れることが決まったときに、ふと、私は本のページを一枚ちぎり、クリアファイルに入れ、バッグの中にしのばせた。本からページが分かたれるとき、そこに書かれた文章はふっと消えた。月日が経ち、生家の本は捨てられ今ではなくなってしまったが、破ったページは今も私が持っている。目をやれば、あの日とまったく同じように文字の蟻たちが蠢き文が生まれる。目をやるごとに異なる文字列が浮かび上がる。本は生まれ直しているのだ。

そこには私にしか知り得ない、私だけの記憶をめぐる挿話もあれば、あるいはそれを読んだ私の脳裏にまさにそのとき浮かび上がった、思考の軌跡のようなものが記述されることもあった。ここに書かれた文章がまさにそうであるように。私はそれを読み続け、私が読み続けるその過程において、本は今なお生まれ続けている。

永遠の眠りの中で夢だけを見続ける男がいたとして、彼が見る夢はいったい何に依拠しているのだろうか。夢の記憶しか持たない男に見られた夢が異なる夢を見せるとき、男が見ている景色はいったい誰の見た景色だというのだろうか。本は私に問いかける。私の中に答えは

なく、問いは据え置かれたままで次の文字列に託される。浮かぶ文字列は消えた文字列に依拠している。未だ存在しない本はかつて存在した本を参照している。

本の切れ端は私に物語の断片を見せる。目をやるたびにそれは変わる。目を閉じればさっきまでの文は消えている。二度同じ文が現れることはない。そして私はその文のことも、その文を読んだこと自体も忘れてしまう。

昨夜見た夢のことをもう覚えてはおらず、見ることのなかった夢のできごとについて思い出そうとする朝のように。（了）

著者解題

「新しい本」についてのプロジェクトと聞いて、本について考えはじめると、そもそも自分は本を読んでいるとき、いったい何を読んでいるのだろうか、という疑問がふと頭をもたげはじめました。

私にとって本とは、一度だけ読まれるものでは決してなく、折に触れて何度も読まれるものであって、そして読み返すつど、目に入ってくる文章や、胸を打つ文章や、そこから得られる印象は、なぜだかいつも異なっており、そのことがずっと不思議に思えてなりませんでした。

本の持つ、そうしたゆらぎ、不確定性、生き物じみたとらえどころのなさ、のようなものを、テクノロジカルに強調する、あるいは、その現象を焦点化して強調して実在性を与えてみると、何かおもしろい思考につながりうるのではないか、と思い、生まれたのがこの短い小説です。

――というのはかなり嘘で、このプロジェクトの最初のワークショップで議論した日の夜、シャワーを浴びていたらなんとなく思いついたので、特に深く考えることもなくそのまま書きました。プロジェクトに貢献しているのかどうかよくわかりませんが、おもしろく読んでいただけたら幸いです。

樋口恭介／ひぐちきょうすけ

SF作家。『構造素子』で第5回ハヤカワSFコンテスト大賞を受賞。『未来は予測するものではなく創造するものである』で第4回八重洲本大賞を受賞。編著『異常論文』が2022年国内ベストSFランキング第1位。その他の著書に『すべて名もなき未来』『眼を開けたまま夢を見る』『生活の印象』。webzine「anon press」編集中。

ウォルポニストの彼女／中村健太郎

大学時代にできた彼女が、筋金入りのウォルポール主義者[1]だった。君もわかると思うけど、彼らがいうところの「添加物入り人生」[2]を、極力排除するライフスタイルを選んだ女性だったというわけ。

しかも彼女はストイックなタイプでね。まず第一に、レコメンド機能を持つ通販サイトを決して利用しなかった。講義で指定された教科書を買う時でさえ、いまやほとんど見かけることのなくなったリアル書店へ出向いて、埃を被った物理本をわざわざ買っていたよ。（何を隠そう、僕が書店という場所に足を運んだのは、彼女についていったその一回きりだ。）

第二に、ショッピングの際にはAI販売員の接客を必ずオプトアウトしていた。服を買う時も、食材を選ぶ時も、家具を探す時も、彼女は自分の良いと思う感情、いわゆるセンスというやつに従っていた。（僕も試してみたけど、めちゃくちゃ疲れた。二度とやらないな。）

第三に、彼女はどうしても避けられない推薦と対峙したときにだけ取り出す、一枚のコインを持っていた。実は僕は、それを一度だけ見たことがある。肌寒い秋のことだった——コインは宙を舞って、ショーウィンドウの光を反射して、地面に吸い込まれていった。彼女は涙ぐんでいたようにも見えたけれど、どうだったかな。（いま言えるのは、二人にありえた可能性が、ひとつの結末へと収束してゆく束の間を、僕らが確かに共有していたということだけだ。たしかに僕らの束の間は極端に短かったかもしれない。けれど、長ければいいというものでもないでしょう？ 遅かれ早かれ、収束するのが可能性というものさ。）（了）

・・・

[1] ウォルポニズム（英: veganism）は、工学的に生成されたセレンディピティを拒絶する主義のこと。セレンディピティが工学的に管理されるようになった近未来において、アルゴリズムから押し付けられるセレンディピティを拒否し、自らの手でセレンディピティをDIYしてしまうというラディカルなアクティビズムの形態が登場する。民主化されたセレンディピティのあり方を追求する彼らは、セレンディピティという言葉の生みの親である18世紀イギリスの小説家、ホレス・ウォルポールから名をとって、「ウォルポール主義者」「ウォルポニスト」などと呼ばれた。（wikipedia日本語版 最終アクセス 2028-10-21）

[2]「人生の煌（きら）めきを疑似乱数に委ねるなんて！」——あるウォルポニストの発言

著者解題

はじめに「ウォルポニスト」というアイデアが降ってきました。それから、彼女がウォルポニストならめちゃくちゃ大変やろなと想像して、それについて書いてみたという次第です。理想と現実のバランスが大事だなと常々思います。3:7くらいがよいんじゃないかと僕は思いますが、いかがでしょうか？

中村 健太郎／なかむらけんたろう

翻訳者・プログラマ。 1993年大阪府生まれ和歌山県育ち。情報技術とデザイン・建築・都市の関係に関心。2016年慶應義塾大学SFC卒業後、NPO法人モクチン企画（現CHAr）ソフトウェアエンジニア、東京大学建築学専攻学術専門職員を経て、現在東京大学情報学環在学中。共訳書に『スマート・イナフ・シティ――テクノロジーは都市の未来を取り戻すために』（2022, 人文書院）。

あなたにおすすめの本は／冨倉由樹央

久しぶりに本でも読むか。ここ最近は仕事が忙しすぎて、まとまった（といっても3日だが）休みを取れたのは1年ぶりだ。休みが取れたといっても自分の意思ではなく、たまたま

契約しているＩＴ会社のサーバがクラッシュして、復旧に最低3日はかかると告げられたことで、単純に仕事ができなくなったことが原因だ。

「お前が来ても邪魔になるだけだから休んでろ」と言われ、はあそうですかと従った。自分の要領の悪さが原因とはいえ、年下のクソ上司に朝から晩まで罵倒されながらの毎日で、私生活なんてものが存在しない1年だった。学生時代の友人たちとの連絡も途絶え、突然降って湧いた休みに誘う相手もいない。昨日は1日寝て過ごして、昼になって起きた連休2日目の昼、出かける場所も話す相手もいない。VR動画を観たりゲームをしたりしようかとも思ったが、これ以上自分の精神を疲れさせる気にはどうしてもならなかった。

ゴーグルをかけてブックシェルフを起動する。すると猫の姿をしたコンシェルジュが本を台車に載せてやってきた。そういえば初期登録画面でコンシェルジュを猫に設定したんだったなあ、と思い出しながら手を伸ばし、台車の一番上の本を手に取る。『自殺の心理学』という本だった。意表を突かれて本を開くこともせず、次の本を手に取ると、それはショウペンハウエルの『自殺について』だった。そしてその次の本は『「死ぬくらいなら会社辞めれば」ができない理由』。

そうか、ここ最近そんな検索ばかりしていたんだ、と改めて自分の精神状態を思い返す。コンシェルジュは自分が「見ることを選択した」情報をすべて蓄積している。検索履歴、街中で目に留まったサイネージ広告、そして俺の人格を否定するような言葉が並んだ上司や同僚からのメール……。そのすべてから割り出された、俺が「今読むべき本」がこれだというわけか。

なぜか、どれだけ辛くても会社を辞める選択肢は自分の中になかった。転職を検討する精神的余裕も時間もない。今から休み明けの出勤のことが憂鬱で仕方ないが、逃げ場なんてどこにもない。

――いや、逃げ場はある。こんな仕事ができない男はさっさと死んで、社会から退場すればいい。誰にどう思われようとかまわないし、あのクソ上司はむしろ喜ぶだろう。ここ1年の勤務状況のひどさを遺書に書いて会社に送りつけてやろうかとちらっと思ったが、自分が何

の記録も取っていないことに気が付いて愕然とした。まあいい、どうせそんな気力もなかったから。

　ブックシェルフの上を見上げて、自殺の具体的方法論が記されている本を探す。あった。『完全自殺マニュアル』か。ずいぶん古い本のようだが役には立つだろう。ざっとページをめくっていちばん手軽そうな首吊りの項を読み、実行することにした。手頃なロープがないからベルトで代用するか、などと考えていたら、乱暴にアパートのドアが叩かれた。何かの間違いかと思って最初は無視したが、ドアは叩かれ続ける。

「開けろ！」

近所迷惑だ。観念してドアに近づき、スコープから外を見る。大学時代の友人だったＳがいた。驚いてドアを開ける。

「お前いま自殺しようとしてただろ？　ブックシェルフで見て急いで来たんだよ」

ああそうか、SNSで承認した友人は自分のブックシェルフや推薦図書を見られるんだった。それで心配して来てくれたのか。まだ自分のことを心配してくれる人がいたと知って、不意に涙が出そうになる。

ずかずかとＳが家に入る。後ろ手にドアを閉めて後を追うと、不意にＳが振り向いた。

「いや、それでさ、どうせだったら手伝えないかと思って」

Ｓの手には太い荒縄が握られている。

かけっぱなしだったゴーグルでブックシェルフを呼び出し、Ｓの本棚を見て納得した。彼の推薦図書の一番上には『快楽殺人の心理』という本があった。（了）

著者解題

自分が今読むべき本を誰に勧めてもらうか。それは著名な作家や批評家だったり、親しい友人だったりするだろう。しかし、彼らはあなたが今までどんな本を読んできたか、そして今、あなたが無意識に、あるいは意識的に何に関心があるのかを知らない。故に、書店で探すよりは効率が良いかもしれないが、自分にぴったりの本と出合う確率はセレンディピティの域を出ない。

では、テクノロジーの力を借りて、あなたが本当(・・)に(・)読む(・・)べき(・・)本(・)をAIが選び出してくれるサービスがあったらどうなるだろう。今まで読んだ本をすべて記憶するだけでなく、自分が目にしたすべての情報を分析し、自分でも気づかなかった本当の興味関心を掘り当て、読むべき本として提示してくれる究極のキュレーションサービス。「知りたいことだけ知りたい」という欲望に応えようとする現在のウェブサービスの行きつく先には、こんな世界があるのかもしれない。

ARゴーグルをかけると、自分を360°取り囲むように本棚が表示される。上を見るとまだ読んでいない本が興味関心の近い順に無限に表示され、下を見るとこれまで読んできた本がジャンルごとに並べられている。そして横を見るとSNSでつながった友達の本棚に遊びに行くこともできる。そんな未来を夢想した。

冨倉由樹央／とみくらゆきお

1972年愛知県生まれ。東京大学文学部仏語仏文学科卒業後、(株)講談社に入社。書籍や雑誌の編集を手掛けた後、現在はデジタル第二営業部部長。

町にひらかれる立ち読み本／中橋侑里

本を買わないで読むことを、「立ち読み」という。かつて紙の本が主流で、本屋というオフラインの店舗に紙の本が並んでいた頃。気になる本を買う前のお試しに、棚の前でパラパラと立ちながら読んでいたからだそうだ。

私は山菜取りの最中、山奥の洞窟で立ち読みをしていた。私のARlensはコンタクト使用であり、それを通して洞窟内を見渡すと、「ここはだれのものなの？ぼくのまちはこわれてく」と手前に少し飛び出た岩に書かれていた。私は山菜を詰めた籠を肩から下ろし、その文字に触れると、空中に本がひらかれた。45年前に起きた侵略戦争の写真とこの洞窟にいた人々の日記がまとめられた本であった。

読み進めていくたびに、私の目の前には当時の空気が広がっていく。私が今座っている場所でも、誰かが身を縮こめて座っていたのだ。〈都市型戦闘用機械人形〉が写っている写真もあった。高さ八メートルにも及ぶ巨人で、頭のない胴体に二本の腕と長い脚、腕には機関銃のようなものが装着されている。その銃口からは煙が出ていて、その巨体は私を見つめるように立っていた。私はその写真を指先でなぞった。すると、画面が変わり、写真の上に説明文が表示された。”2030年に人類が開発した二足歩行の戦闘兵器である。人間の代わりに戦場に立つこともできるため、兵士の役割が大きく変わった。” 他にも多くの写真があったが、一般人の私たちの目には届かないものばかりだった。

ふと目を下ろすと、地面に「結局、だれのものなのか」という問いがかかれていた。そして、「私たちのものに決まっているよ」「この地域の成り立ちとして…」と、それに対する議論が私を中心とした半径1mほどに広がっている。いくつかの議論を見ていると、この本が置かれたのは43年も前のようだった。私はなんだか不思議な気持ちになった。まるで、自分が43年間に渡って議論の様子をずっと見ているかのような気分になっていたからだ。しばらく眺めているうちに、私はあることに気づいた。表紙に書かれている著者の名前に見覚えがある気がするのだ。そこで私はようやく気がついた。これはこの戦争で亡くなった私の父の書いたものだということを……。

私はふっと顔を上げ辺りを見回すと、洞窟の奥にも文字が点々とあることに気づいた。それらに触れていくと、父と同じように当時ここで身を潜めていた人たちが、それぞれ文字を綴り、立ち読み本としてここに残していたことがわかった。いつかの誰かが、ここへ訪れる瞬間に読んでほしいという思いを込めて……。それぞれの著者が産んだ議論に、空間描画ツールを手に取り、応答していった。最後に父の本の元へと戻り、岩に浮かび上がる最初に見た

文字をポケットに入れるそぶりをすると、本の複製が自分のAR内の本棚に置かれる。これでどこでも読むことができる。この購入で支払われた通貨は、この戦争で生き残った人たちによるアーカイブ活動へ支援されるらしい。私はこの活動を始め、この戦争や地域について調べざるを得ない感覚に囚われながら、山菜が詰まった籠を背負い、洞窟を後にした。
（了）

著者解題

小説に出てくる本は、全て電子書籍である。NFTによって電子書籍が、紙書籍と同様に、1冊1冊固有の価値を持つ。以下、電子書籍を本と表記する。

誰でも所有している本を、世界中のどこかに置ける。例えば、戦争が勃発した場所に戦争の写真集を、歴史的建造物前に建物の解説本が置かれている。ARlensを通してみると、現実世界の物体に本の一部引用文が書かれており、本が置かれている目印となる。目印の半径1m内で、ARバーチャルモニターからその本が読める。また同空間では、ARを通して地面など物体に文字や絵を書くことができ、その場にいる人ともしくは、これから読む人と、本の内容を議論することができる。議論やコメントは、その一冊の本の価値として蓄積される。なお本の内容が気に入れば、新しく自分で購入することで、一般的な本（電子書籍）のように場所を問わずに読める。

電子書籍の「場所を取らない」性質を持ちつつ、「読める場所の制限・身体の共有・一冊が蓄積する複製できない価値」つまり「立ち読み×痕跡本」という手触りのある体験である。

個人に棚を貸すことで、誰でも気軽に本屋さんになれるシェア型書店がある。その中で「売りたくないけど、読んでほしい本」が100万円という値で置いてあった。出品したオーナーは、本をSNS上でamazonのリンクと共に紹介するのではなく、”自分が持っているこの本を見てもらうこと”が重要であったのだろう。一方で、本を読むときに、どれだけ自分と接点があるかで本の読みやすさが異なる。自身の専門分野でなくても、訪れた場所に関する内容にはやはり興味が湧く。これら渡し手の「自己表現の根拠」と受取手の「文脈の強要」を、本を読む場所を介して強くする。

新しい本の設計、及び小説の大まかな設定や新しい本の特徴を説明するようなシーンの設計は、予め筆者が行った。小説生成〈AIのべりすと〉を利用しながら、全体の構成や展開の大きい部分から、背景描写や人物の行動など細かい部分までを、詰めていった。AIが提示した展開をそのまま採用することはなく、適当にフィードバックくれる友人や先生という認識であり、参考にしつつも自身で記述していった感じである。例えば、この言葉遣いは後で参考になりそうなど、特に小説を書いたことのない筆者にとって、AIが提案する言葉遣いは非常に参考になった。

画像は、画像生成AI〈midjourney〉で生成。新しい本の設計と小説を書き終えた後、想像通りの情景を生成させるのは困難であった。小説を書きながら画像を生成すれば、画像からインスピレーションを受けて、文章をつくることもできるだろう。

中橋侑里／なかはしゆり

東京大学大学院 学際情報学府 修士課程所属。共に暮らす猫に学び、人のつくるモノや常識で、行動や価値観が縛られている自身から脱して、“人”でも”猫”でもない間を探す。猫の寝床で毎晩寝てみたり、猫の立てる音を立ててみたり。法政大学デザイン工学部システムデザイン学科卒業。

殖える本／菊池洋子

本棚の中で本が増えるのは、本が生殖機能を持っているからだという説がある。

実際に、本には種があるのだそうだ。私のいた小学校では、図書室で本を借りると何かの種がもらえた。先生にはそれは、朝顔の種だと言われたが、本当はそうではなかったのではな

いかと私は思う。その種は実のところ本の種であって、だからそれから私の部屋の本棚の中で、いつのまにか本は増えていったのだろうと思う。

私は想像する。本を読み終わったあと、もらった種と一緒に本棚に入れておくと、寝ているあいだに本の芽が出て花が咲く。朝が来るまでに本は実をつけ、本棚の中で新たな本になる。そしてまた次の夜になると新しい本が生まれる。――そんなふうにして、本はどんどん増えていくのではないだろうか。

私は今、自分の部屋を眺めてみる。山になった本が崩れている。私はため息をつく。

私はもう、図書室で種をもらうことはないが、それからも本は増え続けた。中学に入り、高校に入り、大学に入り、本は速度を増して増え続けているように思える。本棚から溢れたものたちは床の上に積み重なり、その上にさらに別のものが積まれる。それらは上下左右に重なり合って、複雑な層を形成している。ひと目では、もうどこに何があったのかわからないほど混沌とした状態になっている。しかしそれでもなお増殖し続けている。これからもそうなのだろう。

本は殖える。人が種など撒かずとも。まるでどこか遠くの方から、たくさんの種子が自らの意志で、風に乗って運ばれてくるかのように。（了）

著者解題

部屋に本がどんどん増えて困っているのですが、SFを意識しながらそのことをそのまま書きました。書き終えたいまでは、本当に本が生きている植物で、生殖によって増えていたら、おもしろいのにな、と思います。

菊池洋子／きくちひろこ

東京大学大学院生。愛知県生まれ。好きな作家はホルヘ・ルイス・ボルヘスです。

墓前本／原田真喜子

故 M 儀 弔意

Mは1987年3月xx日に山口県徳山市で生まれ、千葉県船橋市で育ちました。幼稚園からの親友であるバイオリニストMとは、中学を卒業してからは数えるほどしか会っていなかった

が、音楽に対する情熱は幼少時から共有していました。県立C高校を卒業後、私立T大学に入学したが、3ヶ月で辞め、公立T大学に再入学し、子育てをしながら10年間勉学を続け、芸術工学の博士号を取得しました。

Mは、学位取得後4年間駐在妻としてヨーロッパに住み、保育園で働く経験を積み、帰国後はデジタルアーカイブ開発の仕事に携わりました。その後、日本学術振興会の特別研究員として、専門性の高い研究に従事しました。Mは6人の子どもに恵まれ、夫と共に過ごす時間も大切にしていました。彼女は、子育てにおいても、研究においても、家族とのバランスを取りながら、自分自身の抱負を追求し、成功を収めました。

Mは、お酒を飲まなかったため、唯一の息抜きは毎晩24:00に夫からもらう一本のセブンスターでした。それ以外は仕事に専念し、アカデミアやフリーランスを繰り返しながら、研究に取り組んでいました。しかし、子供たちが順次巣立ち、夫も定年退職を迎える中、Mはゆっくりと生活することもできるようになりました。そして80歳を前に永眠しました。彼女は生きていた限り、多くの人々に影響を与え、多くの成果を残しました。彼女の貢献は、将来も尊重され続けることでしょう。

・・・

母の墓前に添えられた一冊の本。僕はこんな忙しい人を妻に持つのは避けたいと思っていたが、結構同じような人間を選んでしまった。アカデミア従事者は一族から母で3人目だが、僕の兄弟からは出なかった。

僕は母が深夜に隠れてタバコを吸っていることを知っていた。朝、母の髪からふんわり漂う父と同じ香り。母の葬儀にきてくれる人には知られたくなかっただろう。母の数少ない友人は健康志向のナチュラリストが多いからだ。彼女たちがどう思ったかは聞けなかった。それ以外に母が嫌がりそうな文面はなかった。

そういえば、幼少期に、母がなんの仕事をしているのかよくわかっていなかった。いつも「色々やってるの」とはぐらかされていた。多分、母自身も自分が何を仕事にしていたのかわかっていなかったのではないだろうか。

母が墓前本を依頼した理由の一つに、その辺りの不明瞭性を僕ら兄弟に示したかったのではないかと感じた。結局、AIを使ってもうやむやだったが。

故人のライフログと、インターネット情報、防犯カメラから自動生成されるこの本は、故人を偲ぶために流行した。

仰々しく偉人のように描いてくれるあたりは、一部の人間に好まれた。

しかし、故人が人に知られたく無い情報も含まれるため、幾分訴訟問題に発展したようだ。 母に至っては面白い情報もなく、友人も少ないため、何も盛り上がりはなかった。

僕は、自分が墓前本を利用しようとは思わないが、母のようにコミュニティごとに性格を変える人は、その本質を照らすことを期待していたのだろう。

兄や弟はどう思っただろうか。

故 E 儀 弔意

Eは1960年9月xx日に山梨県富士吉田市で生まれました。幼少期はやんちゃで、自転車で雪山を滑り、骨折したこともありました。友達にも恵まれ、小学校5・6年の同級生とは、現在まで無尽で頻繁に会っていた。

Eは、家族や友人とともに、自然に触れることができる幸せな時間を過ごしました。Eは、学業も順調で、高校を卒業後、大学に進学しました。その後、Eは、自分が専門とする分野での仕事を見つけ、自己実現を図るために、努力をしました。Eは、その仕事を通じて、多

くの成功を収めることができました。その上で、Eは、3人の妻を持ちました。彼女たちとの関係は、皆さんとても愛情深いものだったと聞いています。Eは、それぞれの妻たちとともに、幸せな時間を過ごしました。しかし、それでも、Eは、最終的には、自分の人生を共にする相手を見つけ、1人の妻と子供を持つことを選んだのです。彼は、そのことを後悔することはありませんでした。

一昨日、Eは家族と楽しい時間を過ごしました。その日は何の苦痛もなく、家族と一緒に穏やかで幸せな時間を過ごすことができました。翌日、Eは、体調が悪いのかもしれないと家族に言いました。その日、Eは急激に体調が悪くなりました。家族はすぐに救急車を呼んでEを病院に連れて行き、病院で検査を受けたが、その結果は大変悪いものでした。Eは最後の数日間、家族や友人と一緒に過ごし、何年もの友情を語り合いました。Eはまだ決して諦めず、家族と友人の支えながら最後の望みを叶えるために最後の努力をしました。そして、Eは家族の愛を感じながら、自分の命を安らかに閉じました。最後に彼が思ったのは、素晴らしい人生を送ることができたということでした。

以下、E によるひとこと

家内に宛てた手紙はEの本棚の上から2段目、青いクッキー缶に入っています。

・・・

一人になってから1ヶ月が経ちました。想像以上に喪主は慌ただしいものでした。少しの休憩時間に、熱いコーヒーとアルフォートを1枚添えて、主人の手紙を読むのが日課になっています。2つ並べていたベッドを一つ処分し、部屋はガランと広くなりました。あの人からの手紙は、50年間少しずつ書いてくれていたみたいで、量も内容もまちまちです。

あの人の文字がとても懐かしいです。若い頃と、1年前では筆跡が大きく変わっていました。一番新しいものは、手に力が入らなかったのでしょう、とても弱々しいものでした。50年間、ずっと私に感謝している　ありがとう　と綴ってくれていました。

ですが、主人に他に妻がいたことは知らなかったし、知りたくありませんでした。手紙にたくさんの感謝の意が書かれていましたが、その文を書いているときにあの人の心はどこにあったのでしょう。かつて夫は私にこのような言葉を伝えてくれました。

「いつもあなたを愛している」

「そのときまで、どんなことが起こっても、私はあなたを守り続ける」

私のガサガサの指には、一本の大きな皺が刻まれていました。主人の墓前本を読んだその日、その指輪を外しました。

故 T 儀 弔意・故 Y 儀 弔意

こちらが、ご依頼いただいていましたT様とY様の墓前本になります。

以下の項目をご確認ください。

==========

✅ 短文版、お仏壇に添えるためにご利用

✅ 喪中期間を超えますと自動的に消去されますのでご注意ください

□ 上記2点について了承しました

故 T 儀 弔意

Tは2023年7月xx日に生まれました。千葉県市川市にある公立小学校・公立中学校・私立高校、そして大学はアメリカに留学している。Tはアメリカの日本レストランで出会いました。
ワーキングホリデー滞在のYに出会い、相談に乗るうちにYから受け入れてもらえるようになり、猛アタックの末に結婚に至りました。

しかし、妻のYは結婚後5年で他界しました。心に大きな傷を負ったTは、生きる気力をなくし、アメリカで培ったキャリアを捨ててYの祖国へ移りました。

転居後も、悲しみの傷は癒えず、その後だれとも結婚しませんでした。失意の末、Yの死後1年たった2051年のYの誕生日にYの元へと自ら旅立つことを決めます。彼は、Yを失ったこと以外、彼の人生に後悔はありません。

故 Y 儀 弔意

Yは2024年5月xx日に生まれました。東京都の裕福な家庭で生まれましたが、転勤族であったために、幼少期は国内外で10回以上の転校を経験しています。Tは、自由な環境を好み、高校卒業後はアメリカでワーキングホリデーとして滞在しました。とても美しい容姿だったYは、アメリカでとても熱心なファンを得て、Yの写真が販売されるほどの人気でした。人気がありすぎたことの相談を親身にしてくれたTに次第に惹かれ始め、出会って1年後に生涯の伴侶として選びました。

結婚生活は順調であり、カメラが趣味のTと一緒にたくさん旅行にいき、写真を撮りました。子供はいませんでしたが、とても幸せな日々を送りました。YはTのパソコンから8年分のYが映る大量の写真と情熱的な日記を見つけました。

結婚後5年で夫からの愛情を受けつつも心が弱り、自らの命の火を消しました。

・・・

私は娘が生まれてから一緒に歩んできた旅路を思い出し、Yと出会えたことは奇跡だと思う。娘と結婚してくれたTが娘に対して持つ情熱と愛情に心を打たれ、涙を流しながら深い感謝の気持ちを抱いている。

娘も、義理の息子も私たちより早く他界してしまって、親不孝も甚だしい。娘は、あんなに愛情を注いでくれる旦那を見つけたのに、憔悴しきって若くして自死した。本当に嘆かわしい。結婚して、一男一女を授かった兄はどう思っただろうか。

義理の息子も立派な人だったと思うが、Yがいなくなってからは連絡を取っていなかった。再婚していなかったことに驚いた。

娘もYが隣にいた方が良いと思い、墓前本を申請した。婚姻の証明などをアメリカから取り寄せるのには苦労したが、お互いの愛情を確認することができたので、満足している。

2人分並べると、お似合いの仲の良い夫婦像が誰でも想像できる。私も墓前本を申請したいが、今年で廃盤のサービスになるらしい。なんでも、墓前本を発端にするトラブルが頻発したとか。私の娘夫婦のように、平和な内容にならないものか、嘆かわしい世の中だ。

==========

天声人語

2050年1月xx日をもって、28年続いた墓前本のサービスは終了した。未踏のウイルスが蔓延したことによって、火葬場で見送ることも、葬儀を開くこともできなかった故人と遺族のために2023年にサービスが開始された。「墓前本」は、故人の生前エピソードをAIが書くサービスである。▶発信者によって加工された情報で構成されるSNSによるコミュニケーションが主流となった現在、故人のインターネット情報と数多の防犯カメラから収集される「本物の姿」は、大変人気となった。AIによって情報の取捨選択がされているため、文章は事前の閲覧が認められていない。▶墓前本は、告別式にて、「故人の生前エピソード」としても活

用されてきた。故人が注文する以外にも、故人とさほど親しく交流していなかった喪主や、故人について良い印象を持っていない喪主も頻繁に用いた。故人の姿を描写することができる墓前本の需要は確実にあった。▶墓前本が終了する背景は、複数ある。まずは、AIが生前エピソードを書く際に故人のプライバシーを侵害する可能性があったということ、そして、AIによって書かれたエピソードには事実と異なる情報が含まれていた可能性があったこと。最後に、暴露である。故人が隠したいと考えている場合は記されないが、心の内で誇らしいと思っている場合は、表沙汰になる。例えば、遺族に最も心的ダメージを与えるものの一つに故人の不倫である。日本では少子化対策で一夫多妻が容認されているので、AIで判定することが難しい。故人の愛人を全く疑っていない遺族ほど、墓前本を申請するのでその混乱は計り知れない。▶遺族が想像だにしなかったことが記される面白さと危険性が、AI大国 日本にて一大ブームとなった墓前本である。墓前本のサービスが終了することで落胆する人と、安心する人のどちらが多いのだろうか。故人の生前であれば、添削などできるだろうが、それを許さないのが墓前本である。そして添えられた墓前本について故人はどのように感じただろうか。アンケートを取ることもできない。「死人に口無し」とはまさにこのことである。（了）

著者解題

「将来AIが奪に奪われる仕事ランキング」「AIは今後私たちにどんな影響を与えるのか」という記事が一時期頻繁に見られた。

私たちの一生はAIによってどのような影響を受けるのだろうか。生きる上での体験や知識獲得はどのように変化するのか。新しい本の未来を考える本プロジェクトは、そのような未来について考察する場である。

”男は生涯で3度しか泣いてはいけない”というフレーズが日本にはある。1回目は生まれた時、2回目は母親が亡くなった時、3回目は自分が死ぬ時という。生まれる時に必要とされる技術はAIではなく遺伝子的な、医学的な科学技術だろう。では死ぬときはどうだろうか。もちろん延命などで科学技術が用いられることは自明だが、遺された者に与える部分においてAIが働く箇所はないだろうか。そして、そのAI技術がなんらかの理由で淘汰されることはないか。そのような思いから、本ストーリーを発送した。本作品にはところどころAI (Open AI)によって綴られた文章が混在する。どこがAIでどこが人間の手によるものか、うやむやであったなら嬉しい。

私はAIに自分の一生を語ってほしくない。たとえ偏りがあろうとも、愛する人が綴った文章で私の一生を懐古してほしい。

原田真喜子／はらだまきこ

1987年山口県生まれ。Ph.D.芸術工学。学振DC、育休(専業主婦)、ベンチャー企業フロントエンドエンジニアの後、学振RPD、現在は新しい本寄付講座 特任研究員。SNS上のコメントの体系化・集合知化を支援するビジュアライゼーションについて研究する。

実験教育都市・図書街におけるキュレーション学習：探究学習における「問い」と「街/本」の接続／大井 将生 et al.

Curation learning in experimental educational city of Library district: Connecting 'questions' and 'city/book' in inquiry learning

（大井将生 1 ジョン・スポポビッチ 2 茶屋五郎三郎 3 アリアロス・バル・ネトリール 4, OI Masao1 John Spopowicz 2 CYAYA Gorosaburo 3 Ariaroth Bal Netoreel 4）

1 東京大学大学院学際情報学府博士課程 52 年 Email: oi-masao519@g.ecc.u-tokyo.ac.jp 2 バビディ図書街キュレーション課 3 京都文化芸術図書街デジタル・コンバージェンス室 4 ゴンドア中等学習院フラップター科 1 The University of Tokyo Graduate School of Interdisciplinary Information Studies 2 Babidi Book City Curatorial Section 3 Kyoto Culture and Arts Library District Digital Convergence Unit 4 Gondoa secondary court Flapter studies

（受付日:2073 年 4 月 18 日、採録日:2073 年 9 月 18 日、電子公開予定日:2073 年 11 月 25 日）(Received: April 18, 2073, Accepted: September 18, 2073, Published electronically: November 25, 2073)）

・・・

抄録：本研究の目的は、実験教育都市・図書街の特徴別にみた探究学習の効果を明らかにすることである。そのために、オーシャン型図書街Aとパノプティコン型図書街Bにおける学習者の「問い」を起点としたキュレーション学習を実践する。その際、都市融解型資料探索プラットフォーム「UCERP」を協働的な図書・資料収集と「問い」の構造化を支援する 4 次元空間として活用する。この手法を用いて継続的な学習支援を行ない、学習者の探究リテラシー変容を分析する。その結果、オーシャン型図書街Aにおいて学習成果物に対する評価点が有意に上昇し、学習者の「問い」に基づいて図書・資料を収集する力や複数の図書・資料をもとに考察する力及び自身の意見を形成する力が向上したことが確認された。一方、パノプティコン型図書街Bにおいては学習者の主体的な学習に負の相関が認められた。このことから、オーシャン型図書街とパノプティコン型図書街では「UCERP」を活用したキュレーション学習効果が異なることが明らかになり、Library District Innovative Educational Plan 2100に向けた学習環境構築案の修正が必要であることが示唆された。

Abstract: The purpose of this study is to clarify the effectiveness of inquiry-based learning in different characteristics of experimental educational city of Library district. In order to

achieve this, Curation learning based on learners' 'questions' in Ocean-type Library district A and Panopticon-type Library district B will be implemented. In this process, the urban melting type resource exploration platform 'UCERP' is utilized as a 4D spatial space that supports collaborative book and resource collecting and the structuring of 'questions'. Continuous learning support is provided using this method, and the transformation of learners' inquiry literacy is analyzed. As a result, it was confirmed that the evaluation scores for the learning outcomes increased significantly in Ocean-type Library district A, and that the learners' ability to collect books and resources based on their 'questions', their ability to consider multiple books and resources, and their ability to form their own opinions improved. On the other hand, a negative correlation was noted between the learners' independent learning in Panopticon-type Library district B. The results indicate that the Curation learning effects of the 'UCERP' are different in Oceanic-type library districts and Panopticon-type library districts. It is suggested that the proposed learning environment construction for the Library District Innovative Educational Plan 2100 needs to be modified.

キーワード：図書街、UCERP、キュレーション、探究学習、「問い」、本、デジタルアーカイブ、セレンディピティ

Keywords： Library district, UCERP, Curation, Inquiry learning, “Questions”, Book, Digital archives, Serendipity

・・・

１. はじめに

「図書館の崩壊」から30年。かつて各地の街中にあって知の平等化・知の拠点としての機能を担っていた図書館がその存在意義と役割を喪失したことで、教育・学びのあり方も激変した。デジタル社会の進展により境界線が融解した文献・書籍や歴史的な史資料・芸術作品などの文化資源は、情報化による構造転換に盲目的であった図書館が街中から姿を消したことで、宙に浮いた。

このことは多様な情報・資料を学びに接続させることで探究的な学びを進展させることに期待が寄せられた2020年代の期待を裏切る形で文化資源活用と教育の後退を招き、その影響は2040年代からの深刻な経済低迷と国民のウェルビーイング低下に及んでいることが指摘されている。こうした現状を打破するメディアとして注目を集めているのが、実験教育都市・図書街と都市融解型資料探索プラットフォーム「UCERP」である。

本研究では、図書街における「UCERP」の教育活用のあり方と効果をデジタルアーカイブ学の系譜に位置付けて議論する。そこでまず、2章においてデジタル文化資源をめぐる社会的動向を振り返るとともに「図書館の崩壊」から「図書街の出現」までをデジタルアーカイブ学の視座から概観する。3章では図書街における「UCERP」を活用した探究学習デザインを提示し、4章では異なる方針・特徴を持つ図書街において提案手法を用いて継続的に行った実践結果を示すとともに、その効果について考察を行う。最後に5章において、本研究の成果をもとに今後の図書街及び学習環境のあり方について思索的検討を加える。

２. 研究背景と関連研究

2.1 文化資源の活用をめぐる社会的動向

UNESCOは2015年、ミュージアムの主要機能の一つとして教育を位置付け、学校と連携した教育的プログラムの開発・伝達を推進するよう勧告した[1]。その後、United Nationsが採択した、“EXD for 2045”におけるXDG4に基づいた目標の中でも、有形・無形の文化資源を活用した学びの推進が掲げられた。国内においても、2018年には文化財保護法[2]、2022年に博物館法[3]、2030年に図書館法が改正された。これらの動向は「収集・保存から活用へ」という目的を共有しており、文化資源政策が大きな転換期を迎えたことを示していた。

2.2 文化資源のデジタル化と社会との関係

ドラスティックな情報化に伴い文化資源のデジタル化が進展したことで、人間の行動や能力、メディアとの関係のあり方も変化してきた。

マクルーハン（1987）は、活字印刷による人間の拡張が、国家主義やマス市場・教育の普及をもたらしたとし、その要因として「印刷は正確に反復可能なイメージを提供し、社会的エネルギーを拡張させる、まったく新しい形態を刺激した」ことを指摘した[4]。メイロウィッツ（2003）は、デジタル化されたメディアが、「時間と空間の意味を変え」、私たちが古い「場所感」を失うにつれて、「社会的行動とアイデンティティに関する新しい考え方を手にしていく」と主張した[5]。このような中で2020年代からは、博物館や図書館といったトポス、すなわち特定の空間・場所性の中で保存されてきた文化資源が、反復可能なイメージとなったことで、そのあり方や意味を変化させていった。デジタル化された文化資源について、UNESCO（2027）は、次のように述べている。

「将来の世代のために保持されるべき永続的な価値あるデジタルヘリテージは、今や特定の形を有せず継続性を維持すると同時にあらゆるイノベーションで活用可能な可変性が求められ、多様な形式によって将来に継承されることが求められている」

こうしたデジタル文化資源をめぐるアプローチとその活用に関してGoshiy（2041）は、欧州の2030年代のデジタル文化資源戦略が、かつてMLAと呼ばれていた博物館・図書館・文書館のあり方や存在意義の変容を迫り、学校や生涯学習における文化資源活用の様相を世界的に革新させた契機となったと評価している。

日本では、内閣府（2017）が「デジタルアーカイブ社会」の実現を提唱し、各地の図書館などが構築するデジタルアーカイブによる知の循環を持続的なものとし、その便益を社会・国民に還元することが目指された[6]。これにより、Society5.0社会において知識や情報が最適に共有され、新たな価値を生み出す仕組みを構築することが、国の方向性として位置づけられた。さらに、デジタルアーカイブス学会（2023）による「デジタルアーカイブ憲章」では、デジタルアーカイブが社会にもたらす変革や目指すべき理想像が構造的に整理され、その実現に向けた各アクターの行動指針が具体的に提示された。この憲章は2064年の第10版に至るまで継続的に検討・修正が加えられ、日常に溶け込んだデジタルアーカイブが人々の学びや生活に資する知の基盤形成に貢献した。一方で、物理的な機能に固執したMLA、とりわけ図書館は、デジタルアーカイブの黎明期から2020年前半にかけてはデジタルアーカイブ

構築に積極的な機関も見られたものの、多くの館はその本質的な存在意義を見失い、機能不全に陥った。次節以降では、「図書館の崩壊」に繋がる動向をデジタルアーカイブ学の系譜に位置付けて振り返る。

2.3 ボトムアップな集合知のアーカイブ

ジャック・デリダ（2010）は、アーカイブの原理について「権威や法規範によって記録・保管される行為」であるだけではなく、「記号を集めながら共に署名する行為」であると指摘した[7]。こうしたアーカイブの両面性に加えて、吉見（2017）は、人々の記憶が集積する「記憶の場所」、さらにはその深層にある集合的無意識の次元まで含めたアーカイブを考えなくてはいけない、と述べている[8]。

また、アーカイブの主体のあり方も変化し、レコードキーピングにおいては「専門家」の能動的な活動が重要であるとされている[9]。一方で、「非専門家」が織りなす集合的無意識は、知の循環の中に記録されず、消失していく傾向にある。しかしながら、そうした集合的無意識の記録は、エリック・ケテラール（2019）が主張したように、未来において権力に対抗する際に活用可能な社会的財産となり得るもの[10]である。Kurotoa（2028）はこうした集合的無意識や、その基盤となる日常の中に埋め込まれた様々な生活の記録・記憶をボトムアップにアーカイブするためのハブ機関として、図書館が中心的な役割を担うべきだと主張した。欧米では2030年代にかけてこの理念に基づいた動きが広がったものの、日本の図書館ではそうした取り組みは見られなかった。日本で図書館に代わってこの活動を担うとともに、デジタルと街、街と集合知を紐付けて参照可能な形でアーカイブを蓄積したのが、「ウィキペディアタウン」活動であった。ウィキペディアタウンの取り組みは、市民の主体的な活動によって、埋もれていた膨大な地域資料の書誌情報の簡便なアーカイブが実現できることを示し[11]、後の「図書街の出現」の基盤を形成した一つの系譜であったと筑紫（2061）は評価している。

2.4 フローからコミュニケーションの創発へ

吉見（2017）は、新しい知識創造のためには、インターネットを媒介した情報のフロー化だけでは不十分であることを指摘した上で、フローで流れていくネットワーキングの軸である集合知と、アーカイビングの軸である記録知が両方組み合わされることで、初めて新しい知が生み出されるとした[8]。庭田・渡邉（2019）は、デジタルアーカイブ／社会に“ストック”されていた白黒写真を AI 技術でカラー化し、ソーシャルメディア／実空間に“フロー”を生成した。この手法により、過去の資料を媒介とした対話が誘発され、生成された

“フロー”において活発なコミュニケーションが創発することで、情報の価値が高められることが示された[12]。“フロー”化を契機として創発されたコミュニケーション・データは、Syaruru（2032）らがGoriate社と共同開発した文脈マッピング型ストーリーテリング・アーカイブシステムの普及によって世界的なアーカイビングムーブメントを伴って蓄積されることとなった。この時期から積み重ねられたデータ群は、現在の図書街における地域特性やユニークさを構成する土台になっている。

2.5 コミュニケーションの創発から知の循環へ

学習場面においてフローとコミュニケーションによって新たに紡ぎ出される知、すなわち「子どもたちの学びという情報」は、2010年代まではアーカイブの対象とはされてこなかった。しかしながら、子どもたちがその時代ごとに、どのような図書や文化資源で、何を学び、何を考えたのかという「情報」も、新しい知識創造のための環に統合されるべき「集合知」として、「記録知」と接続した形で未来に継承されるべきである。さすれば、E.H.カー（1962）が「過去と未来との間に一貫した関係を打ち樹てる時にのみ、歴史は意味と客観性とを持つことになる」[13]と述べたように、デジタルアーカイブが、各時代を生きる子どもたちと―過去―未来を繋ぐメディアとなることで、図書や文化資源に新たな価値を与え、社会に還元する知を創造することができるのである。

知の循環のためのメタデータ・アーカイビングを図書館が担うべきであるというGonza（2029）の提唱に呼応するように、2030年代から米国のライブラリアンを中心にデジタル文

化資源の教育活用の文脈における知の循環運動が展開された。また、知の循環はデジタル空間と身体の拡張を架橋するために実空間、とりわけ文化的背景が溶け込んだ街を基盤として整備されるべきであるという第一期の図書街構想も2030年代後半に立ち上がった。

2.6 知の拠点への警鐘

高山（2008）は、日本社会に図書館・アーカイブズ利用のリテラシーが欠落していると警鐘を鳴らした[14]。高山によると、暗黙知と形成知を繋ぎ、創発的に知を社会全体で循環させるためには、MLAの利活用は小数の愛好家だけでなく多数の市民によるものである必要があった。したがって、MLAの文化資源をフロー化し、新たな価値を生み出すことで知を循環させるために、市民のMLAを活用するリテラシーの育成が求められた。H.Nappa（2025）は、そうしたMLA活用リテラシー及び情報リテラシー育成の拠点として図書館が機能することがVUCA（Volatility、Uncertainty、Complexity、Ambiguity）時代の民主主義を支えると主張した。

このようなデジタルシフトに伴う「知の拠点」としてのあり方の変化に最も果敢に挑んだのも、米国のライブラリアンたちであった。彼らは、豊田（2022）が『闘う図書館』の中で示したように、伝統的な読書活動の枠を越えて、インターネットへの対応、政権との対立、移民の受け入れ、コミュニティの再生など、時代時代の社会問題に対して公正な知の拠点として、「何を変えたか」という基準で向き合ってきた[15]という土壌があった。

一方、日本の図書館員は2030年代に入ってもなお、図書貸し出しサービス中心の業務形態から脱却できなかった。さらに、日本の図書館員が専ら扱い続けたのは商業出版物であり、学校教育で需要の高い地域や自館固有の多様な資料を収集・保存・公開し、レファレンス業務に組み込むことには意欲を示さなかった。蛭田（2019）は、地域資料が図書館法において収集すべき資料の筆頭に位置付けられており、法的にも図書館が地域資料を扱う必要性を指摘した上で、地域資料サービスを「他に転嫁できない最終的な責任」を持って実践する重要性を示していた[16]。福島（2021）も、蛭田の議論をふまえ、地域資料概念を社会的なデジタルシフトを念頭において拡張することで図書館機能の再定置を図る必要性を主張し、そのことが学校教育現場への寄与にも繋がることを指摘していた[17]。しかしながら、2030年の図

書館法改正も虚しく、日本の図書館は世界的なDX化の潮流に取り残され、ガラパゴス化が進んだ。

Yupa（2055）は、図書館員が2020年代に業務に対する意識改革と構造転換を行えなかったことこそが、日本の「図書館の崩壊」最大の原因であったと分析している。地域資料の収集・保存・デジタル化・公開・活用に力を入れなかった自治体は、「図書館の崩壊」に伴いアイデンティティを失い、地域の魅力と向き合い・考え・発信することを教育段階からデザインした一部の地域との間で居住先・納税先の人気及びそれに伴う経済格差が進展した。この格差が図書街の誘致結果にも直接的に影響を及ぼしたことは議論を待たない。

2.7 「図書館の崩壊」と「図書街の出現」

ここまで概観してきたように、日本における図書館機能は漸進的に瓦解したと捉えることができるものの、その崩壊が決定的となったのは2030年の図書館法改正以後最大の論争を呼んだ2043年のインドラ事件時であるとするのが通説となっている。名実ともにその役割と機能及び物理的な存在空間を喪失した図書館は、2040 - 2050年代にかけて、長く暗い冬の時代を迎えることとなる。

学校のあり方の本質的な転換が世界的に迫られたのもまた同時期のことであった。これは、間接的には2010年代に現れたミネルバ大学を筆頭とするオンライン授業を基本的なプログラムに位置付けつつもキャンパスを持たずに国や都市を移動し、各地域の社会的な課題を解決しながら様々なスキルやリテラシーを学ぶという、いわばデジタル空間と「街」を教室とする教育機関が世界的かつ初等中等教育にも波及してのことであった。そして直接的には、2019年からのCOVIDパンデミック時に顕在化したオンライン学習環境構築の必要性の高まりに加え、さらに深刻な被害をもたらした2036年からの長期にわたるNEMESISパンデミックによって従来型の教育システムの限界が世界的に顕著になったことに起因している。

こうした社会教育・生涯教育・学校教育システムの危機に際して、図書館の再興と捉えるかどうかは意見の割れるところであるものの、街から知の拠点たる物理的な空間が姿を消した社会に一縷の光を差したのが、2050年代後半から起こった、第二期の図書街構想であった。

第二期構想が後の実験教育都市・図書街の実現に繋がった背景には、第一期とは異なり様々な分野やアクターによる「協創」を理念として持っていたことが挙げられる。たとえば学術的には、第一期の議論が図書館情報学界隈での限定的なものであり、予算の確保など具体的なアクションに結びつかなかったことに対し、第二期では情報学・博物館学・社会学・法学・教育学・教育工学・建築学・都市工学・デザイン学・物理学などの有識者が集い、学際的な議論が展開された。また、各国が図書街の実現を国家戦略に位置付け競争原理が働いたことで大規模かつ継続的予算が投下されたこともプロジェクト進展を後押しした。こうして各国では、2060年代からかつてない規模での産学官の連携が生じ、実験教育都市として多様な特徴を持つ複数の図書街が誕生した[Fig.1]。

Fig1. 各地に出現した多様な特徴を持つ図書街

2.8 図書街の理念と特徴

図書街は新たな学びの場／メディアとしての機能を「街」という空間に溶け込ませることを基本理念として構想・構築された。それゆえ、教育学や社会学、学習論や都市論における議論を参照して制度が設計された例が少なくない。

例えば、米国、イタリア、オーストリア、メキシコ、プエルトリコなどでは、I・イリッチ（1977）の『脱学校の社会』[18]の理論を再構築する形で図書街構想が進められた。この系譜においては、受動的で自由でない学びを社会構造と結びつけて批判し、主体的な学びを取り戻すことを前提として、コリンズ（2012）が「学習者は、学校教育を自己の将来と関係のないものと捉え、忌避している」[19]と指摘した近代以降の伝統的な教授法からの脱却を実現するための街空間が設計された。米国でこの動きを組織的に推進したのが2000年代初頭から「問い」に基づいた学習に重きを置いてきたIBBの一派であったが、図書街受け入れ予定都市に対する高額なプログラム料が公正な教育の逆コースを助長するとして市民からの反発を招き、結局IBB主導型の図書街は一部の富裕層居住区でのみ実装されることとなった。

日本における図書街構想は上述した市民参加型のボトムアップな地域活動を基盤とした系譜の他には、多様な分野・アクターが学際的に集うデジタルアーカイブ学会での議論と実践を基盤として展開された系譜がある。この系譜においては、吉見（1987）の『都市のドラマトゥルギー』[20]以後の都市社会学における上演論的パースペクティヴを拡張する議論が土台となって図書街デザインが進められた。すなわち、「都市に張りめぐらされる様々な戦略的な関係を、全体社会の構造と結びつけつつ明らかにしていく手掛かりをつかむ」という視座を教育に応用し、「個性」が都市の提供する図書街という装置やそこに埋め込まれた本によって、人々の関係性を様々な場面で媒介していくことが目指されたのである。この文脈においては、「「個性」を選択することが個性的であることを証明し、「私の世界」を持つことが自己のアイデンティティを証明することでもあるかのように感覚していく」という吉見の都市社会学的な指摘と、教育学における主体的に学びに向かう視座、すなわち学習における「自分ごと化」のための前提条件となる「自分とは何か」「学びの先にある未来／将来の望ましい自分とは何か」という問いの交差する場として図書街のデザインが進められた。そ

の議論においては、吉見が指摘した「絶えずより「自分らしく」あろうとして、新しい「個性」を＜演じる＞ことに駆られ続けていくという「呪縛」を解き放つ機能として、また、巨大資本によってモール化され、画一化した街や、それに伴う行動様式と価値観からの脱却を目指す形で、街に図書を／本を／本棚を溶け込ませる図書街が形成されたのである。そうした理念に、後にノーベル物理学賞を受賞したPorco（2036）の衝撃的な研究成果を基盤とした2040年代の工学・物理学分野の貢献によって爆発的に進展した都市における高度な物質可変の実現と、情報学、とりわけLOD（Linked Open Data）分野の研究成果が融合することで、図書街は流動的な物理・情報空間として立ち現れた。

2.9 二極化した図書街

図書街の黎明期には各地の文化的特徴を反映する形で多様な様相を呈していた図書街であったが、Pagot（2068）らによると、現在はオーシャン型図書街とパノプティコン型図書街の二極化が進んでいる。街全体が本棚であるという構造は両者共通しているものの、オーシャン型ではより可変的かつ流動的に本棚が出現する傾向が強い。溶ける／変化する／形を変える本棚機能が日々出現する場所の変動性や、各人の前に現れる本の多様性もオーシャン型図書街の方が顕著に高い。それゆえ、オーシャン型図書街では、街という本棚が日常的にセレンディピティを生成し続けており、 本を媒介とした他者との出会いにも溢れている。自宅の本棚との接続有無や、図書街に集い・学ぶ人々の多様性も両者を隔てる相違点であろう。

オーシャン型図書街での学習システムでは学年・年齢や属性・背景は関係なく、校舎や教室という概念も存在しない。街全体がいわば学校であり、教師は教員免許を必要とせず、学習者との関係も対等である。画一的な教授方法もなく、例えばある教師は本棚が不定期に出現するまでは昼寝を取り、本棚が現れしだい教師も初めて手にとる本を媒介として議論を始める。またある教師は、図書街が生成する偶発的な本の並び自体に焦点を当てて日々の探究をファシリテートする。

次章では、オーシャン型図書街及び対局的特徴を持つ超監視型実験教育都市・パノプティコン型図書街における探究学習の効果を明らかにする。

３. 提案手法

*本論文の第3章以降、本論をご覧いただくためには、デジタルアーカイブス学会にご入会いただき、2073年度分の学会費をご納入いただく必要がございます。お手続き、お問い合わせは学会HPよりお待ちしています。（以下ページ省略）

謝辞

本稿は講談社・メディアドゥ「新しい本」寄付講座 を母体として行われたSFプロトタイピングW.S.の議論を基に執筆した. 執筆に際してご助言いただいたSF作家の樋口恭介先生に感謝の意を申し上げる.

註・参考文献

[註]本稿は2023年1月に創作したフィクションであり, 特定の学会による査読手続きを経て刊行されたものではない. また, 2023年以降を描いた記述内容は, 実在の人物や団体・事件等とは関係がない.本稿の作成に際して議論の土台として参照・引用した論文・書籍・資料を以下に示す.

[筆者論文]

(1).大井将生. 東京大学大学院学際情報学府修士学位論文. (2).DOI:10.24506/jsda.7.1_e1
(3).https://cir.nii.ac.jp/crid/1520294485138697728

[1] UNESCO 国際連合教育科学文化機関. ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告. 2015. [2] 文化庁. 文化財保護法改正の概要について. 2018. [3] 文化庁. 博物館法の一部を改正する法律（令和4年法律第24号）について. 2022. [4] M.マクルーハン. メディア論 人間の拡張の諸相. 栗原裕, 河本仲聖訳. 1987. みすず書房. [5] ジョシュア・メイロウィッツ. 場所感の喪失 ・上 電子メディアが社会的行動に及ぼす影響. 安川一, 高山啓子, 上谷香陽訳. 2003. 新曜社. [6] 内閣府知的財産戦略推進事務局. 我が国におけるデジタルアーカイブ推進の方向性. 2017. [7] ジャック・デリダ. アーカイブの病. 福本修

訳. 2010. 法政大学出版局. [8] 吉見俊哉. なぜ、デジタルアーカイブなのか? -知識循環型社会の歴史意識. デジタルアーカイブ学会誌, 2017, 1 (1), p.11-20. [9] Sue Mckemmis. 痕跡 ドキュメント, レコード, アーカイブ, アーカイブズ. アーカイブズ論記録の力と現代社会, CHAPTER 1, 安藤正人訳. 2019. 明石書店.[10] Eric Ketelaar. レコードキーピングと社会的な力. アーカイブズ論記録の力と現代社会, CHAPTER6, 安藤正人訳. 2019. 明石書店. [11] 青木和人. 地域資料デジタルアーカイブに市民参加型ウィキペディアタウンが果たす意義. デジタルアーカイブ学会誌, 2017, 1 (pre), p.37-42. [12] Anju Niwata, Hidenori Watanave. Rebooting Memories: Creating “Flow”and Inheriting Memories from Colorized Photographs;Proc.of SIGGRAPH ASIA 2019 Art Gallery/Art Papers, 2019, (4), p.1-12. [13] E.H.カー. 歴史とは何か. 清水幾太郎訳. 1962. 岩波新書. [14] 高山正也. 日本における文書の保存と管理. 別冊『環』15, 図書館・アーカイブズとは何か. 2008, p.42-57. 藤原書店.[15] 豊田恭子. 闘う図書館 アメリカのライブラリアンシップ. 2022. 筑摩選書.[16] 蛭田廣一. 地域資料サービスの実践. JLA図書館実践シリーズ41. 2019. 日本図書館協会.[17] 福島幸宏. 地域資料の可能性. 図書館雑誌, 2019,115 (9), p.568-571. [18] イヴァン・イリッチ. 脱学校の社会. 東洋, 小澤周三訳. 1977. 東京創元社. [19] Aコリンズ, Rハルバーソン. デジタル時代の学びのかたち. 稲垣忠編訳. 2012. 北大路書房.[20] 吉見俊哉. 都市のドラマトゥルギー 東京・盛場の社会史. 1987. 弘文堂.

著者情報

大井将生（おおいまさお） / 東京大学大学院学際情報学府/東京大学大学院情報学環特任研究員/TRC-ADEAC特任研究員. 公立高等学校教諭を経て, 現職. 「デジタルアーカイブの教育活用」をテーマとして情報学やデジタルヒューマニティーズの視座から学校教育を対象とした実践的研究に従事. 主な研究に「ジャパンサーチを活用したキュレーション学習」「S×UKILAM（スキラム）連携」「学習指導要領LOD」など.（了）

著者解題

基本的に論文は過去の研究をふまえて書かれるものですが、本稿は未来を妄想しながら書いた異常論文です。図書館が小さい頃から大好きで、特別な場所でした。でも今は、その図書館に危機感を持っています。「図書館とは、何か？」そんな問いがこの文章の根底にあります。これを読んでくださった皆様と、図書館や本の未来について語り合いたいです。未来のそれがワクワク・ドキドキする場になっているといいですね。

なお本稿の論文フォーマットバーションは以下のリンクからご覧ください。https://researchmap.jp/m-oi/published_papers/41567037/attachment_file.pdf

大井将生／おおいまさお

東京大学大学院学際情報学府/東京大学大学院情報学環特任研究員/TRC-ADEAC特任研究員. 公立高等学校教諭を経て, 現職. 「デジタルアーカイブの教育活用」をテーマとして情報学やデジタルヒューマニティーズの視座から学校教育を対象とした実践的研究に従事. 主な研究に「ジャパンサーチを活用したキュレーション学習」「S×UKILAM（スキラム）連携」「学習指導要領LOD」など.

奥付

書名：新しい本

電子書籍発行日：2023/03/03

© 新しい本 チームB